

第 11 回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日 時：平成 29 年 6 月 12 日（月）10:00～12:15
2. 場 所：沖縄科学技術大学院大学（OIST）
3. 出席者：
 - ・ 検討会構成員
平澤座長、相澤委員、伊集院委員、岡崎委員、西澤委員
 - ・ OIST（議事 1 に参加）
グルース学長、バックマン首席副学長、久保副学長、高梨副学長
 - ・ 内閣府
渡部審議官、池上事業振興室長、水本企画官、田巻専門官、山下専門官、川島専門職
佐久田振興企画官、田中係長
4. 議事次第：
 - 議事 1 平成 28 年度における学園の業務実績について
 - 議事 2 平成 30 年度概算要求に向けた意見について
 - 議題 3 その他

5. 議事要旨

<議事 1>

グルース学長より、平成 28 年度における学園の業務実績等について説明があり、概ね以下の質疑応答があった。（○は委員の意見又は質問、→は OIST の回答）

（研究資金について）

- 日本における科学技術予算は、対 GDP 比 1%という目標を掲げているものの、実際には 0.5%程度を推移している。また、その予算は大企業の研究の補助にまわされる傾向にあり、基礎研究に十分に投入されていないという課題がある。

→ 早い時点でシード研究となるようなものに資金を投入しなければ、芽がでることはなく収穫をすることもできない。科学技術の世界では長い目で見ることが重要である。

（教育研究について）

- サイエンスマップにおいて、メインランドタイプ（主流派）、ペニンシュラタイプ（メインランドから突出して新しい領域に広がりをもつもの）、アイランドタイプ（メインランドと関係なく独立したもの）といった分類があるが、新しいリサーチフィールドを形成することが求められている現在において、OIST の研究パターンは、ペニンシュラタイプやアイランドタイプといった傾向にあるのか。また、日本におけるイノベーション施策は、短期間で経済成長として成果を出すことを目指しているため、ブレークスルー・イノベーションが起こることは難しく、非常にクリエイティブであるがハイリスクな研究には資金が投入されないという悪循環が生じている。OIST において検

討しているイノベーションを起こすための仕組は、ブレークスルー・イノベーションにつながるものなのか。

- 沖縄においてイノベーション・エコシステムを構築できないかと考えている。構築に当たり、OIST がどのように貢献できるかということだと思う。今後、スタートアップをどう起こしていくのか、ベンチャーキャピタルをどう備えていくかといったこと等について検討を深めていきたい。

(規模拡充について)

- 学生の応募人数が増えている。また、平成 29 年度は、男女の比率や出身大学がバラエティーに富んでいるなど、非常にバランス良く獲得できていると感じる。どのような取組をされたのか。
- 応募人数の増加は、OIST が世界的に認知されてきたことの表れだと考えている。また、学生を獲得するための取組としては、日本人学生を増やすため、日本の大学向けに様々な広報活動を行っている。特に、日本のトップクラスの大学からの入学者を増やすため、インターンの受け入れを進める予定である。
- 整備を検討中のインキュベータは、OIST の研究成果を、他の研究者、企業、金融機関等とつなぐといった要素が非常に重要であるが、その「つなぐ」といった要素について、どのようにお考えか。
- 「つなぐ」といった要素に当たっては、様々なツールがあるが、OIST において一番重要なツールはインキュベータのための施設である。OIST のテクノロジーを発展させるだけの施設にとどまらず、世界から起業家等を誘致してくるマグネット役となるよう戦略的に取組みたいと考えている。

<議事 2 及び議事 3>

事務局より資料について説明した後、構成員より以下のような主な意見があった。

(規模拡充について)

- OIST の要望しているインキュベータのための施設は、施設だけでなくどのように運営していくかが重要である。
- OIST の要望しているクリーンルームは、技術革新が非常に早い分野であるため、今ある施設では機能が十分でない可能性がある。今後の研究分野の採用方針にもよるが、施設の必要性は理解できる。
- OIST の要望している動物実験施設は、社会風潮的に批判のリスクを伴うものである。各大学とも外部から分からないよう細心の注意を払い運用をしている。
- 動物実験施設を必要とするような研究分野を、戦略的に強化していくということであれば、施設の必要性は理解できる。
- 施設整備の在り方は、OIST の採用する研究分野の方針と密接に関係する話である。
- OIST が、今後どのように成長していくのか、規模だけでなく中身を含めて計画する必

要がある。

(共同研究・産学連携について)

- 沖縄という立地を考えると、「OIST でなくては」という技術がなければ、企業との共同研究につなげることは難しい。共同研究を拡大するのであれば、OIST として、何をどのように主張していくか考える必要がある。

以上